

二つの『蟬しぐれ』

——本文の異同から創作意図を考える——

高 橋 敏 夫

1

『蟬しぐれ』⁽¹⁾は、藤沢周平作品にあつて最も評価の高い作品である。歴史時代小説の読み巧者でもあつた文芸評論家の秋山駿に、「この『蟬しぐれ』は、時代小説ではなかつた。歴史小説でもなかつた。いや時代小説というなら、これは新しい時代小説であつた。それも本質的に新しいものだった。私はかつてこのような形と内容と雰囲気の時代表小説を読んだことがない」という最大級の賛辞があり、社会・思想評論から歴史時代小説評論に転じた中島誠は『藤沢周平論』⁽²⁾を「数多の要素を含む藤沢周平の代表的ロマンの一つ」の『蟬しぐれ』を論じることから始めた。そして、山形師範学校時代の友人で森鷗外を中心に近代文学を研究する蒲生芳郎は、「藤沢時代小説の頂点に立つのはやはり『蟬しぐれ』であろう。牧文四郎を主人公とするこの青春小説には、作家藤沢周平の切実な青春体験すべてが投影されているからだ」と書く。牧文四郎、小和田逸平、島崎与之助の類稀な友情物語、文四郎の

群を抜く剣技、おふくと文四郎の悲恋、卓越した自然描写等への注目は、多くの『蟬しぐれ』評で共通する。

『蟬しぐれ』はまた、宝塚ミュージカル「若き日の歌は忘れじ」(一九九四年初公演)、テレビドラマ(NHK総合テレビ、二〇〇三年)、映画(蟬しぐれ製作委員会・東宝配給、二〇〇五年)とメディアミックス効果もあり、人気作品『用心棒日月抄』(一九七八年刊行年、以下同じ)や『三屋清左衛門残日録』(一九八九年)以上に、藤沢周平作品で最もよく知られた作品でもある。冒頭部分は、中学校国語教科書(光村図書『国語3』、二〇〇五年)に採られている。

第三八回「オール読物」新人賞を受賞した「涙い海」(一九七一年)、第六八回直木賞を受賞した「暗殺の年輪」(一九七三年)から、最後の作品となった『漆の実のみのる国』(一九九七年)まで、遅い出発ながらおよそ四半世紀にわたり話題作を発表しつづけた藤沢周平は、多くの作家に影響をあたえ、歴史時代小説界には藤沢周平山脈といふべきものが形成され、今に至る。乙川優三郎、故・北重人、あさのあつこ、諸田玲子、葉室麟、安住洋子らである。

作品ではとりわけ『蟬しぐれ』の影響はつよく、近年においても第一四六回直木賞を受賞した葉室麟の『蜩ノ記』（二〇一二年）や、安住洋子『遙かなる城沼』（二〇一四年）などにそれがはっきりとみてとれる。藤沢周平山脈をなす作家たちが、バブル経済崩壊後の「失われた二〇年」とも呼ばれる時代において、永くつづく時代小説ブームの主要な担い手であるのを見るなら、藤沢周平の生前はもとより没後においても、『蟬しぐれ』は時代小説ブームをささえつづける作品の一つといつてよい。

こうした世評の高さにもかかわらず、作者藤沢周平にとって、『蟬しぐれ』は相反する二つの思いをもたらす作品だった。エッセイ「新聞小説と私」⁽⁵⁾で藤沢周平はこう記している。「『蟬しぐれ』は、一人の武家の少年が青年に成長して行く過程を、新聞小説らしく剣と友情、それに主人公の淡い恋愛感情をからめて書いてみたものだが、じつを言うとこれが苦痛で苦痛で仕方がなかった。何が苦痛かというと、書けども書けども小説がおもしろくならないのである。会心の一回分などというものがまったくない。／＼こういうときは無理な工夫なんにしても仕方ないので、私はつとめて主人公の動きにしたがい、丹念ということだけをこころがけて書きつづけた」。

新聞小説がいつもこんな思いをもたらしただけではない。藤沢周平は、このエッセイを書く時点で過去に六篇の新聞小説を書いていた。郷里の敗者清川八郎をめぐる『回転の門』（一九七九年）、「彫師伊之助捕物覚え」シリーズの第一作目となった『消えた女』（一九七九年）、上杉景勝および直江兼統の闘いをえがく『密謀』（一

九八二年）、唯一の長篇市井ものである『海鳴り』（一九八四年）、「彫師伊之助捕物覚え」シリーズの第三作『ささやく河』（一九八五年）、そしてこの『蟬しぐれ』である。歴史小説あり、捕り物あり、戦国武将ものあり、市井ものあり、そして武家もの（『海坂藩』もの）ありと、多様なジャンルに亘っており、藤沢周平には新聞連載小説になる、ならないといったジャンル別の認識はなかったものと思われる。また、「掲載一回分の原稿用紙三枚という分量が執筆の波長に合う」とも書いているので、新聞連載形式での創作に苦手意識もなかったはずである。そうであれば、この「苦痛」の思いは、最後の新聞小説となった『蟬しぐれ』という物語のありかたにかかわるだろう。

つづけて藤沢周平は書く。「作者が退屈するほどだから、読者もさぞ退屈したことだろうと私は思った。連載中、もちろん一通のファン・レターも来なかった。華やかさに欠けると思われた『海鳴り』が連載中、意外にもたくさん女性の読者から便りをもたらったのともちがっていた。しかし——思いは反転する。」「ところが、である。一冊の本になってみると『蟬しぐれ』は人がそう言い、私自身もそう思うような少しは読みごたえのある小説になっていたのである。これは大変意外なことだった。ばかばかしい手前味噌めいた言い方までしてあえてそう言うのは、新聞小説には書き終えてみなければわからないといった性格があることを言いたいためである。／＼新聞小説というのは、ふしぎなおもしろい発表舞台だなあとという感想を、いまも私は持っている」。連載中の「苦痛」「おもしろくならない」についてのストレートな表

現にくらべると、思いの反転をめぐるこの文章は曖昧さをふくみ表現の屈折がみられよう。いったい、なにがおきたのか。

『蟬しぐれ』が文藝春秋から単行本として刊行されたのは一九八八年五月、掲載紙の一つであった「山形新聞」での連載が終わってからほぼ一年が経っていた。藤沢周平は、新聞連載の初出テキストである『蟬しぐれ』を「一冊の本」にするプロセスで、物語の最終章「蟬しぐれ」を中心に重大な加筆訂正等の改稿をおこなっていたのである。しかも、加筆訂正等はテキスト全体に及ぶ。藤沢周平の「苦痛」の連鎖から「少しは読みごたえのある小説」へとという思いの反転はこの改稿からきているのではないか。改稿が物語をがらりと変えたのではない。物語に伏流していた対抗的な力を改稿がじゅうぶんに顕在化しえたことで、ようやく思いの反転はおきた。だから、「なっていた」という表現もけつしてまちがいとはいえない。わたしは前に、新聞連載版テキスト（初出の新聞連載版の本文）と初刊本版テキスト（初刊本の本文）で最終章の本文の異同を調べ、そこから『蟬しぐれ』の創作意図を探ってみたことがある。本稿では本文異同の調査をテキスト全体にひろげ、その主な異同の検討から創作意図をたしかめるとともに、「苦痛」から「少しは読みごたえのある小説」への思いの反転の理由を具体的に明らかにしたい。

2

本文の異同で最も著しいのは最終章「蟬しぐれ」である。文四郎一五歳、おふく一二歳から始まった波瀾にとむ物語から二〇年

余、牧文四郎は郡奉行牧助左衛門となり、藩主に先立たれたお福さまは髪をおろして尼になることをきめていた。ある日唐突にもたらされたお福さまからの手紙に込め、助左衛門は漁師村の湯宿でお福さまに再会する。その最終場面、すなわち束の間の抱擁の後、「ありがとう文四郎さん、とお福さまは湿った声で言った。／＼これで、思い残すことはありません」に続く文章は、新聞連載版テキストでは次のようになっていた（A）。

A

お福さまと侍女の駕籠が砂丘の陰に消えるのを見とどけてから、牧助左衛門は馬上にもどった。裾短かな着物を着、暗い顔をうつむけて歩いている少女の姿が胸にうかんでいる。お福さまに会うことはもうあるまいと思った。さつきは気づかなかった黒松林の蟬しぐれが、耳を聳するばかりに助左衛門をつつんで来た。

（完）

この部分は、初刊本版テキストでは、一行の空きをいれたうえで、大幅に加筆訂正がなされた。新聞連載版テキストにあった表現には傍線を付して示す（B）。

B

階下に降りると駕籠が待っていた。時刻を定めて迎えに来た駕籠は、はたしてただの町駕籠だった。駕籠はお福さまを美濃屋にはこび、お福さまはそこからさらに駕籠を乗り換え

て城にもどるのだらう。

お福さまと侍女が、無言のまま会釈して駕籠に入るのを、助左衛門は馬のくつわを執りながら見守った。そして駕籠が門を出てから、宿の者に会釈して自分も門の外に馬を牽き出した。砂まじりの白く乾いた道を遠ざかる駕籠が見えた。そして駕籠は、助左衛門が見守るうちに、まばらな小松や昼顔の蔓に覆われた砂丘の陰に隠れた。それを見とどけてから、助左衛門は軽く馬の顔を叩き、一挙動で馬上にもどった。ゆつくりと馬を歩かせた。

——あの人の……。

白い胸など見なければよかったと思った。その記憶がうすらぐまではくるしむかも知れないという気がしたが、助左衛門の気持ちは一方で深く満たされていた。会って、今日の記憶が残ることになったのを、しあわせと思わねばならない。助左衛門は矢尻村に通じる砂丘の切り通しの道に入った。裾短かな着物を着、くらい顔をうつむけて歩いている少女の姿が、助左衛門の胸にうかんでいる。お福さまに会うことはもうあるまいと思った。

顔を上げると、さつきは気づかなかった黒松林の蟬しぐれが、耳を聳するばかりに助左衛門をつつんで来た。蟬の声は、子供のころに住んだ矢場町や町のはずれの雑木林を思い出させた。助左衛門は林の中をゆつくりと馬をすすめ、砂丘の出口に来たところで、一度馬をとめた。前方に、時刻が移っても少しも衰えない日射しと灼ける野が見えた。助左衛門は笠

の紐をきつく結び直した。

馬腹を蹴って、助左衛門は熱い光の中に走り出た。

A、Bともに「ありがとう文四郎さん、とお福さまは湿った声で言った。／『これで、思い残すことはありません』に続くのであれば、Aでは、「牧助左衛門」と改めて呼んで距離を示し、「思い残すことはありません」というお福さまの言葉を助左衛門がしかとうけとめ共有しているのを確認するかのように、簡潔に物語が締めくくられる。これはこれで、みごとな完結といえるだろう。しかし、作者藤沢周平はBで多くを加筆し訂正を試みた。この異同から読みとれるポイントは四つある。順に記す。

(1) お福さまの駕籠が砂丘の陰に隠れるのを助左衛門が「見とどけ」るAに対し、Bではお福さまが駕籠に入るのを「見守った」助左衛門は、遠ざかる駕籠をずっと「見守る」、そして駕籠が見えなくなるのを「見とどけた」。お福さまとの最後に臨み助左衛門がBではA以上に能動的、主体的にかかわることが執拗に示されている。

(2) 「——あの人の……。」以下でBは、お福さまとの二〇年以上のかかりにおいて、助左衛門の気持だが、わずかな悔いとともにではあるが、はじめて「深く満たされ」、「しあわせ」な思いにとどいている。Aにはこの思いの語りはない。

(3) 物語全体のタイトルであり、最終章のタイトルでもある「蟬しぐれ」が、Aではただ「黒松林の蟬しぐれ」であるのに対し、Bでは、少女おふくの記憶と一緒に、「子供のころ

に住んだ矢場町や町はずれの雑木林」の記憶を甦らせている。ちなみに物語中、「蟬」の語が記されるのはこの部分を含め、新聞連載版テキストでは一九回（内訳は、第一章にあたる「朝の蛇」で二回、同じく第二章の「夜祭り」で一回、第五章「黒風白雨」で一、一回、第六章「蟻のごとく」で四回、そして第二章にあたる最終章「蟬しぐれ」で一、一回。初刊本版テキストでは、新聞連載版テキストの一九回に加え、「蟬しぐれ」での「蟬の声」で二〇回となる。そのうち、「蟬しぐれ」という言葉は、両テキストで変わらず「黒風白雨」と「蟬しぐれ」の章に一度ずつ記されるのみ。物語中、蟬は夏ならいつでも、どこでも鳴いているのではなく、文四郎が子供のころ住んでいた矢場町での生活、とりわけおふくとかかわりの場面と、父助左衛門に突如襲いかかった悲劇が儉しく助けあいながら暮らしていた日々を破壊してしまう場面とに限定される。矢場町での生活はのちに、与之助と酒を飲む場面で、「文四郎の家も、小柳の家も、山岸の家も古びていて、畳はいつもケバ立ち、襖はつくろってもすぐに破れるのだった。／物がなげれば貸し借りもし、到来物があれば分け合って、貧しくとも気心の知れた暮らし」（染川町）として文四郎の心に甦る。とくに消滅しながらも、いわば水平的な人間関係の理想郷として文四郎の心に生きつづけた「子供のころ住んだ矢場町」が、最後の最後で助左衛門に甦り蟬しぐれとともに物語の締めくくりに加わるのだ。

(4) Aで、「牧助左衛門」と語られた助左衛門が「蟬しぐれ」

につつまれながら物語は終わるのに対し、Bでは、「馬を進め」、「馬を止めた」、「笠の紐をきつく結び直した」、そして「馬腹を蹴って」、「熱い光の中に走り出た」と、助左衛門の行為を執拗に連ねている。これは、(1)で示された去りゆくお福さまへの、助左衛門の能動的、主体的なかわりと呼応するとともに、さらに進めて物語全体を助左衛門の能動的、主体的な行為で締めくくる。改行して示された「馬腹を蹴って、助左衛門は熱い光の中に走り出た」がそれをあらわす。

それぞれに意義をもつ(1)と(4)とはいえ、共通するのは助左衛門の能動性あるいは積極性、主体性の強調である。こう考えれば、最終章での、結末部分に先立つもう一つの大きな加筆部分、お福さまと助左衛門との会話のうちで、助左衛門の「娘も、そろそろ嫁にやらねばなりません」と、お福さまの「江戸に行く前の夜に、私が文四郎さんのお家をたずねたのをおぼえておられますか」との間に加えられた文章(C)と、Bはつよく響きあう。

C

「二人とも、それぞれに人の親になったのですね」

「さようですね」

「文四郎さんの御子が私の子で、私の子供が文四郎さんの御子であるような道はなかったのでしょうか」

いきなり、お福さまがそう言った。だが顔はおだやかに微笑して、あり得たかも知れないその光景を夢みているように

見えた。助左衛門も微笑した。そしてはっきりと言った。

「それが出来なかったことを、それがし、生涯の悔いとしております」

「ほんとに？」

「……」

「うれしい。でも、きつとこういうふうに終わるのですね。

この世に悔いを持たぬひとなどいないでしょうから。はかない世の中……」

お福さまの白い顔に放心の表情が現れた。見守っている助左衛門に、やがてお福さまは眼をもどした。その眼にわずかに生氣が動いた。

苦難に耐えた文四郎の成長物語（本編）から二〇年余のち、

助左衛門（文四郎）とお福さまとの再会（後日譚）は、お福さまからの必死の働きかけによって実現した。始まりの章「朝の蛇」で、やまかがしに噛まれたふくの右手の中指の傷口を、文四郎がためらわず吸った能動的行為をただひとつの例外として、二人の関係において文四郎は受動的でありつづけた。本編でそうであったように、二人の関係はこの二〇年余のちの後日譚でもまた、能動的なお福さまと受動的な助左衛門から始まったことになる。助左衛門への封書による呼びかけがお福さまなら、会話の主導権もお福さま、過去へと二人の関係を導く「文四郎さん」という言葉もお福さまである。Cでも始まりにおいて、この関係は変わらない。

しかし、お福さまの言葉をうけとめたうえで助左衛門がはつき

りと「それが出来なかったことを、それがし、生涯の悔いとしております」と断言した瞬間、二人の関係は大きく変化する。お福さまを「見守っている」助左衛門にもそれはあらわれている。これまで受動的であった助左衛門が能動的になり、能動的でありつづけたお福さまは能動性を維持したまま、二人は思いと身体をかさねる。

二人の新たな関係が、お福さまに「これで、思い残すことはありません」と語らせ、その言葉につづくBの場面での、助左衛門の思いと行為の能動化、主体化によって鮮明になる。こう考えれば、助左衛門とお福さまの関係において、最終章「蟬しぐれ」はたんなる後日譚ではなく、物語のタイトルが最終章のタイトルであるとおり、後日譚の形式をとった、そのじつ、物語にとって不可欠の完結編といってよい。

3

もちろん、最終章における助左衛門の能動化、主体化は、お福さまとの関係においてのみあるのではない。さきにあげた（1）～（4）のうち、（3）では「子供のころ住んだ矢場町」他の記憶、すなわち水平的な人間関係の理想郷を助左衛門は甦らせ、（4）では、物語全体を締めくくるような、過剰とも思える行為を助左衛門は最後に選びとっている。つまり、助左衛門の能動化、主体化は、お福さまとの関係と同時に、物語全体にかかわっているのである。

しかしそれにしても、いったいなぜ、作者藤沢周平は、加筆訂

正等によつて、かくまで執拗に牧助左衛門を能動化、主体化させねばならなかったのか。

最初の章「朝の蛇」で、海坂藩普請組の組屋敷の裏を流れる小川——物を洗い、汲みあげて菜園にそそぎ、ときには顔を洗う小川を「天与の恵み」と言祝ぐ人びとの貧しくも穏やかな生活を背景に、やまかがしに囁まれたふくの指の傷口を吸うという果敢で能動的な行為を瞬時、文四郎にあたえたのち、物語は文四郎から能動性を奪い、そして奪い、さらに奪いつづけたのである。

血はつながらぬものの敬愛する養父の助左衛門が、世継ぎ問題にもからむ藩内の政争から腹を切られたとき、一六歳の文四郎はただその死を受けいれ、父のなきがらを無言のまま蟻のごとく運ぶしかない。捨扶持をあてがわれて粗末な家に母と一緒に住むことも受けいれないわけにはいかない。毎日のように行動をともしていた二人の友、島崎与之助は学問のため江戸にでて、小和田逸平は城勤めが始まり以前のようにには会えず、文四郎は孤立感を深める。江戸屋敷の奥に勤めることに決まり、おそらくは独断で訪ねてきたふくとは会えなかった。空鈍流の石栗道場での修行は以前のような積極的な鍛錬というより、罪人の子、反逆者の子と蔑む周囲への鬱憤晴らしの様相を呈しはじめる。まさしく、文四郎は、受動性の一大容器のようである。

父のかつての友で番頭の藤井宗蔵が烏帽子親となり元服した文四郎に、父の敵対した派閥の里村家老から呼び出しがかかり、旧縁に復し郡奉行支配とすると言いわたされた。実際の勤めは二年後。喜ぶ文四郎に、兄は「その間、身をつつしんで上ににらまれ

るようなことのないようにしろ」と言う。事態の好転はかえつて文四郎を今まで以上に窮屈な場所に追いこむ。そして間をおかず文四郎は、ふくに藩主の手がついたのを知る。

城への出仕が始まり、妻を娶った文四郎はこれまでの五年を振りかえる。「牧の家名を守ることは、父の助左衛門の死をむかえたときから、文四郎を縛る鉄則となつた。(中略)／顧みて文四郎は、奔放であるべき年少の日々を、ああも小心翼翼と過ごすほかなかつた自分を憐れまずにはいられない。反逆者の家にむける世間のひやかな眼に堪え、自分を押さえて、ひと筋の糸ほどのか細さで残された家名を保つのに汲々としたのだ。その鬱屈した気持ちのただひとつの捌け口が、石栗道場の修行だったのである。空鈍流の剣がなければ、堪えられはしなかつたろう」(「誘う男」)。そして、思う。「長い間のその辛抱は、いま報いられたと文四郎は思っている。家禄と人並みの暮らしがもどり、職をあたえられ、妻を得た。年月経ればやがて子が生まれ、職の上でも、怠りなく勤めればいつかわずかな昇進ぐらいはのぞめるかも知れない。いまはそういう行く末を思い描くことも出来た。不遇のどん底にいたときも、悪声を放たず、人と争わず、身を慎んで剣と学問に精出して来たからだ。しかし——「報いられた」現在と仄明るい「行く末」ゆえにこそ、文四郎は「安泰」を願ひ喪失の恐怖にとらえられる。そして、敬愛した父がかつて加わった派閥、横山家老派からの誘いにのれない。良吏である文四郎も認める誘う男(青木孫蔵)が、「おれを蔑みはしなかつただらうか」と思ひ悩む。

父の切腹から始まった苦難の生活に、おふくをめぐる災厄にも似た事態と、物語は若い文四郎にただ受けいれる、しかない二つの過酷な運命を与える。ただし、根本的な受動性は、物語が文四郎にこの武家秩序から外にでることを許さず、「小心翼翼」かつ「汲々」とした保身の変更を許さないまま、あくまでも内部に留まらせつづけたことにかかわる。多くの評者が称える数多くの自然描写も、この内部における文四郎の受動性の停滞、変わらなさに、かろうじて時の推移をもたらずモチーフに思える。それは、石栗道場での席次上昇と次々にあらわれる強敵との対決にもいえるだろう。

『蟬しぐれ』の舞台とする架空の「海坂藩」が最初に登場する短篇「暗殺の年輪」は、政争にかかわった父の死、剣の修行、道場仲間、政争に加担しての暗闘——若い主人公葛西馨之介の境遇と行為は、『蟬しぐれ』の文四郎のそれに似るが、一点異なるのは、馨之介が町人のお葉を介して武家秩序の外への通路をもつことである。父と同じく藩政のはてしない闇に踏みこんだ馨之介は、上の者が下の者を使い捨ての垂直的な武家秩序にいて、侍をつづける愚と無惨さにたえられない。追手から逃れ走りだすと、「これまで牀にまよっていた侍の皮のようなものが、次第に剥げ落ちて行くような気」のする馨之介の足は、いつしかお葉のいる店の方にむかっていた。「暗殺の年輪」は、馨之介に藩政の暗黒をはらむ武家秩序の受容を強いたのち、そこから外へとふみだす能動性を最後の最後で付与する。海坂藩ものの第一作かつ武家もの時代小説の第一作である「暗殺の年輪」は、武家秩序への疑問

だけでなく外への志向を持っていた。のちの「用心棒日月抄」シリーズや『よろずや平四郎活人剣』（一九八三年）で藤沢周平は、脱藩者や浪人、旗本の冷や飯食といったキャラクターで、武家秩序の外すなわち食うには困るが自由な境遇を、登場人物たちに謳歌させている。

『蟬しぐれ』にはそんな外もなければ、「暗殺の年輪」におけるお葉のごとき外への通路もない。文四郎は小心翼翼と家名を守るばかりか、垂直的な武家秩序の頂点へと拉致されたおふくを思い、鬱屈をかかえつつ内部で生きるほかない。もちろん、武家秩序への疑問、怒りが文四郎にないのではない。父と一緒に腹を切らされた矢田の妻女、淑江が家に縛りつけられた末に自殺に似た死を選んだ時、文四郎は藩の処置と「武家の掟」を憎み、「理不尽な世の仕組み」を憤る。しかし、外をもたぬ物語にあって、文四郎の疑問、憤りは内部を生きる文四郎の鬱屈をいっそうはなはだしいものにする。

若い文四郎のこうした設定は、藤沢周平時代小説にあってじつに特異といわねばならない。『蟬しぐれ』とならぶ長篇青春小説「獄医立花登手控え」シリーズの主人公立花登も、抱えこんだ「鬱屈」を柔術の稽古で発散するが、町医者の卵にして獄医として働く登は、武家秩序の外、市井を生きている。町医者で叔父の娘おちえとの関係で、おふくのようなことは起きず、シリーズ最後で結ばれ希望の未来へと二人でふみだす。

連載をつづける藤沢周平の「苦痛で苦痛で仕方がなかった。何が苦痛か」というと、書けども書けども小説がおもしろくならな

い」という苦しみは、主に若い文四郎の特異な設定からくるに
がいない。したがって、お福さまの子を奪えと里村家老から藩命
を受けた文四郎が、それを逆手にとってお福さまと子を救いだ
し、秘剣を伝授された元首席家老加治織部とおし横山家老のも
とにとどけたのち、「多年鬱積するままにして来た憤りを解き放
ちたい衝動」(「逆転」)から里村家老に直接一言物申す行動を自らの
意志で選ぶ——そんな物語最大のクライマックスともいえるべき
場面をえがいてもなお、藤沢周平の「苦痛」はなくならなかった。
まだ二〇歳の文四郎の生はこれからであり、物語が武家秩序の外
を用意していない以上、文四郎はこれまで同様、内部を生きるほ
かない。今回の働きに対し褒章を期待し、横山家老が示した加増
三〇石を、「予想もしなかった大幅な加増」(「刺客」)と喜び驚き
頭を下げる文四郎は、ひたすら受動的であることを強いてきた武
家秩序に、そして何時また第二、第三の文四郎をうみだすか知れ
ぬ武家秩序に、幾ばくかの満足感、達成感をいだきつつ戻って
いくのである。

4

惨憺たる事態をただ受けいれ、「奔放であるべき年少の日々を、
ああも小心翼々と過ごすほかなかった」と思う文四郎に、おなじ
武家秩序内部での能動性の芽、主体性の芽のようなものが、まっ
たくなかったのではない。むしろ、父への敬愛からはじまるそれ
は、文四郎のうちを確実に伏流し、ときどきおもてにあらわれ
ていた。

全二一章のうち第一五章にあたる「行く水」から文四郎の城へ
の出仕が始まる。稲垣、里村派による藩政の独占がはつきりとし、
文四郎はこれまでに以上に「孤立無援の立場」を自覚しつつ。しか
しそんな受動性のきわみに直面する文四郎に、与えられた仕事を
とおし反転の契機がきらめきのようにならわれる。文四郎の職名
は郷村出役見習いで、いずれは領内の田畑山林を見回り、稲作の
検見にも加わるといふ役だが当分は見習いで、上司の郡奉行榎村
弥助の供をして村や山の見回りをする。そして、次章「誘う男」
で、村回りを繰り返す文四郎は思う。「農事のこととは依然とし
て半分もわからなかったが、文四郎にも穂を持ちはじめた稲のう
つくしさはわかった。それまでずっと榎村や同僚、村人の稲の生
育を見守る気魄のようなものを見て来たせいだった。稲作にかぎ
らず、総じて農事は、やり直しのきかない真剣勝負のようなもの
だということも悟った^①」。そう思う文四郎は、かつて嵐の夜、十
町歩の稲を救うために土堤の切開場所の変更を主張した父助左衛
門の考えに初めてとどくのだった。

ただし、この章では農事そのものへの文四郎の関心はこれ以上
深まることはない。物語は農政をめぐる両派の対立、すなわち村
方を絞上げる政策が得意な稲垣・里村派と、村方と親密な関係
を保つ横山派との対立を浮かびあがらせ、良吏青木孫蔵から横山
派への誘いをうけた文四郎は、返事を留保する。が、里村派が優
勢なら自分もやがて酷吏となる、それは堪えられないという思い
は、里村からの藩命に背く行為へとつながる。郷村を回る文四郎
が陽に焼けて真っ黒になりながら、「仕事は無限にあるよう」に

思い、「あたえられる仕事に少しずつ興味を深め」、仕事に積極的にかかわりだすのは、ようやく、「本編」最後の章「刺客」においてである。

農事を柱に郷村の安寧を維持する仕事に、平四郎が積極的、能動的にかかわっていくとば口を示して本編は終わり、そして二〇年余。「蟬しぐれ」の章は、郡奉行に出世した牧助左衛門が、代官所を宿所にし、熱心に仕事にはげむ様子から幕を開ける。植林の見回りに配下の者とともに寝泊りし、奉公の者たちへの思いやりも細やかな助左衛門は、下役人たちのねぎらいの言葉につまれての登場となる。垂直的な武家秩序に助左衛門は可能な限りの水平的な人間関係をさしこむ⁽¹²⁾。こうした良吏助左衛門の姿は、次に展開するお福さまとのやりとりに先駆けて示された能動性、主体性のあらわれともいうべきか。この能動性ゆえに助左衛門は、お福さまの呼びかけを受けとめた。初刊本版テキストでこの部分にいつさいの加筆訂正等はない。

しかし、助左衛門がかくまでに打ちこむ郡代奉行の仕事の意義については、新聞連載版テキストではじゅうぶんに説明されていたとはいいたい。

初刊本版テキストで加筆された部分を次に示す(D)。「誘う男」の章が始まってすぐ、村々を回りだした文四郎が仕事のおおよそを確認する場面である。

D

むかしの郡奉行は、もっぱら領内の山林の管理、河川堤防

の見回りと普請を受持ち、ほかに郷方の公事訴訟の取扱い、罪人の取締りなどを役目としたものの、稲の検見や田畑の被害状況の判定に加わることはなかった。そうしたことはすべて代官所の所管だったのである。それを近年のように郡奉行の権限を強化して、一部代官所の職務を監察出来るように改めたのは、かつての名家老加治織部正だという。

あるいは織部正の執政中に、代官職の間に汚職行為でもあつて、その種の行為の再発を防ぐ意味でいまのような形に改められたということも考えられるが、そうではなくて、加治織部正は単純に藩政のもつとも必要な部分である農事に、係り役人の専断が働くことを防ごうとしたのかも知れなかった。いずれにしろ、今度も郡奉行配下の出勤は、すばやく行われたのである。

石栗道場の秘剣を文四郎に伝授する際、元首席家老加治織部正は、父がかかわった政変のあらましを話し、稲垣・里村と横山両派の不毛な政争を批判した。そして、父の助命嘆願書が村々から出されたことを教え、「政治とは要するにそういうことで、治められる側の気持ちを汲むことだ」(秘剣村雨)と、取り入れ前の稲田を守った父の行為を称えた。Dは、政争には超然とした位置を確保しつつ、藩政の理想を文四郎に語った加治織部正はまた、藩政のよりよき仕組みを整えた「名家老」であったと告げる。「藩政のもつとも必要な部分である農事」という表現も、のちの郡奉行牧助左衛門の働きを意義のあるものに押しあげるだろう。過酷

な政争も理不尽な暴力も武家秩序ゆえだが、そんな武家秩序の内部においても、否、内部にいるがゆえに可能な変更あるいは改革はあり、打ちこむに値する仕事はある。父の行為のほんとうの意味を文四郎に教えた加治織部正の生き方は、Dの加筆によって、文四郎にとって積極的に選びとるべき生き方の範型となるのである。

ところで、牧文四郎が郡奉行牧助左衛門となったこの二〇余年の間、はたして海坂藩の政情はどのようなものだったのか。第二、第三の不幸な文四郎をうみだしはしなかったのか。もしそうなら、助左衛門の仕事は報われまい。

直接触れられないものの、「蟬しぐれ」の章で語られる、助左衛門の郡奉行への出世、藩校の教授を勤め数年後には学監となるであろう島崎与之助、御書院目付となり子供が八人もいる小和田逸平の安定した現状などからすれば、幸い、大きな政変は起きていないようである。

しかし、こうした語りだけでは、作者藤沢周平は心もとなかったのだらう。本編最後の章「刺客」において、初刊本版テキストでなされた訂正がある。まず、新聞連載版テキストの文章を示す(E)。

E

稲垣、里村のほかは、稲垣派の中老である多田左門が一カ年の閉門を命ぜられ、稲垣、里村の手足になって働いた者十名ほどが、最高半年の閉門から謹慎、減祿の処分を受けたに

すぎなかった。櫛御殿襲撃の責任者であることが明白な中村七郎右衛門も、三カ月の閉門と家禄半減の処分で済んだ。

横山家老が稲垣、里村派に対して下した処分のあらましである。「すぎなかった」、「済んだ」と繰り返えされ、処分の軽さが強調されている。里村は領外永久追放、稲垣は郷入り処分と重い処分ではあるものの、前の政変のように死者はださなかった。寛大な処分で派閥の解消を狙ったのか。処分は藩内には大方好感を以て迎えられたとつづくのだが、初刊本版テキストでは、「一カ年」が「百日」に、「半年」が「五十日」に、「三カ月」が「五十日」に改められた(なお、「中村七郎右衛門」は「村上七郎右衛門」に――これは全編を通した変更である)。こうした期間短縮を示す訂正は処分の軽さをいっそう印象づける。短くすることで、藩内の政治的融和をさらに確実なものにできる。第二、第三の不幸な文四郎はうみださなかった、とはいえ政争が完全になくなったという非現実的なそれでもない、しばらくは小康状態を保つたらしい武家秩序のなかで、作者藤沢周平は、本編ののちの助左衛門に、より積極的に郡奉行の仕事にかかわらせなかったにちがいない。

下の者を上の者が使い捨てるといった垂直的な武家秩序への認めがたさから、武家もの時代小説を始めた藤沢周平は、しかし、『蟬しぐれ』では少年牧文四郎に父とふくをめぐる惨い出来事を受けいれさせたうえ、それらをもたらしただけで暴力的な武家秩序に閉じこめた。しかも、新聞連載の長篇小説というスタイルは、拘禁にも似た境遇を文四郎に長く強いた。物語には他方で、

文四郎の受動性のきわみでそれを反転させる契機となる能動性の仕掛があった。武家秩序の外へではなく、武家秩序の内部であるがゆえに秩序を動かしうる可能性へと物語は文四郎を導こうとする。しかしそれは文四郎の物語に伏流しつつも、実現は、文四郎の惨憺たる青春物語ののちに始まる助左衛門の新たな物語においてだった。こうしたことが、文四郎の特異な設定とも相まって、作者藤沢周平に「苦痛」をあたえつづけたのだろう。そして単行本にする際の改稿によって、まるで文四郎の受動性をまるごと引き上げ反転させるような助左衛門の能動性を顕在化させるなどしたとき、ようやく藤沢周平に「少しは読みごたえのある小説」との手ごたえがもたらされたのである。

注①『蟬しぐれ』は、「山形新聞」他数紙で連載された。「山形新聞」夕刊での連載は、一九八六年七月九日から一九八七年四月一三日まで。本稿では「山形新聞」連載版テキストと、初刊本版テキストである『蟬しぐれ』（文藝春秋 一九八八年五月）を使用する。特に断りのない場合は引用は初刊本版テキストからとし、本文に異同があればその都度示した。

- (2) 秋山駿「解説」（文春文庫版『蟬しぐれ』一九九一年七月）
- (3) 中島誠『藤沢周平論』（講談社 一九九八年一月）
- (4) 蒲生芳郎「藤沢周平 その生涯の追憶」（山形新聞社編『没後十年藤沢周平読本』二〇〇八年八月）
- (5) 藤沢周平「新聞小説と私」（三友月報 一九九一年八月）、新潮文庫版『ふるさとへ廻る六部』（一九九五年五月）所収。
- (6) 『藤沢周平という生き方』（PHP新書 二〇〇七年一月）。なお、鶴岡市立藤沢周平記念館・開館記念特別企画展図録『蟬しぐれ』の世界（二〇一一年二月）には、最終回の直筆原稿の写真と、最

終回原稿翻刻が掲載されている。

- (7) 「水平的な人間関係の理想郷」は、藤沢周平が創り出した架空の「海坂藩」の原イメージであった。まゝに「海坂、または逆境のユートピア」（歴史読本「二〇一二年三月」）で考察した。

- (8) 藤沢周平の没後に発見された一連の作品（未刊行初期短篇）のうち武家もの時代小説「無用の隠密」（『忍者小説集』一九六四年八月）でも、次つぎに使い捨てられる隠密の悲劇をとおして武家秩序への疑問、怒りがあらわれている。

- (9) 「用心棒日月抄」シリーズは、『用心棒日月抄』（一九七八年、『孤剣』（一九八〇年）、『刺客』（一九八三年）、『凶刃』（一九九二年）の四作品からなる。

- (10) 「獄医立花登手控えシリーズ」は、『春秋の檻』（一九八〇年）、『風雪の檻』（一九八一年）、『愛憎の檻』（一九八二年）、『人間の檻』（一九八三年）の四作品からなる。

- (11) この文四郎の思いを引用しつつ、中島誠は前掲書で、『蟬しぐれ』の主要テーマの一つとして、『農』についての、つまり耕してつくることへの執念と歓喜」をあげている。

- (12) こうした郡奉行牧助左衛門のありかたは、『風の果て』（一九八五年）の主人公桑山又左衛門のそれと著しく異なる。又左衛門は夢と野心から郡奉行を務めたのち、中老から首席家老へと登りつめる。権力者となった又左衛門に若き日の道場仲間市之丞から果たし状がとどくところから始まる物語は、惨憺たる結末と空漠とした思いを又左衛門にもたらす。両作品はともに武家秩序の外部をもたないが、主人公二人の内部での生き方は正反対といってもよい。藤沢周平は明らかに、『風の果て』を強く意識しながら『蟬しぐれ』を書いている。

* 本稿は、科研費（基盤研究C）課題番号25370239の「（歴史・時代小説ブーム）の戦後精神史（二大作家の比較研究による）」の成果の一部である。